

いぢごせり

フリーペーパーの業界で長年で生きてきた人間の悲しいサガとでも申しましょうか、早くから出版を公言しておきながら、お金を払って読んで頂くといいことへの抵抗は、思っていた以上に大きなものでした。電子ブックという形をとろうと決めたのは、そんな理由からでした。

〈ガリヤ戦記〉は、ガリヤを通じて、私が見聞きし、体験し、考え、行ってきた様々な出来事を記述したのですが、いかにノンフィクションであれ、他を批判したり自己を正当化するような表記を感じるところがございましたら、どうか、一笑に付して頂きますよう…。

物事とはそもそも、状況や立場によつて様々な見かたがあるものです。ここに記述されたさまざまなおエピソードは、あくまで私個人の「心」というフィルターにかかったものですから…。

270ページほどのやや長編となりますが、最後までおつきあい頂けましたら、幸いです。

はじまりの章

ものすごく寒くてどこか熱いはじまり

1989年12月27日。この地球上で一番寒かった生き物は、北極のシロクマでも南極のペンギンでもない。おそらく私たちだ。

猪俣、香川、木下、清澄、瀬川、谷口、藤、野村、村田、村山、山本、そして私の十二名は、あつたかな新築オフィスに別れを告げて白銀の街に飛び出した。風に舞う無数の雪ひらたちが、髪に顔に襟もとに、容赦なく降りては滲みていった。

「まだですか？」

「……たしか……このあたりだったと思うけど……」

「何か目印とかありませんか？」

「無い……でも……こっちだったような……」

なんとも頼りないナビだったが、

「あつたっ！——」

……と、ラッキーにも辿り着いたのは、かなり老朽化の進んだビルアパートである。

皆を迎え入れるため率先して部屋に入ったが、なぜか後が続かない。皆さんドア前でウロウロしている。

「さあ入って！入って！早く入って！——」

さもありません。部屋は冷凍庫さながらの冷え様でしかも畳間だ。ブーツを脱いで入るには、バンジージャ

ンプほどの決心が必要だったのだ。

やがて畳に立った彼女たちは、舌を凍らせたかのように無口になった…と、その時だ。

「さむい…」

と、誰かが発したこのひと言が、伝染した。

「さむい」「さむい…」「さむい」「さむい」「さむいね」「さむいー！」「さ…む…い…い…いっ」「さむ…い…」「さむいよお」…え…私のせい…？

——我慢しようよ！あつたかな自社ビルを建てるから！貴女たちのために、自社ビルを建てるから！約束するから！——

これがガリヤの、ものすごく寒いけど、どこか熱い始まりだった。

ほんの少し前までの私たちのオフィスは、新築でオシャレで広くてヌクヌクだった。

Q: どうしてこのような事態になったの？

A: 私がエルフを叩き出されたから。

Q: どうして叩きだされたの？

…その答を探るため、エルフでの月日からまず、振り返るとしよう。

高校時代の後輩がヘッドハンティングにやつて来た

そもそも私がなにゆえこのような仕事をしてきたかというのと、なりゆきだ。なりゆき川に流されるまま流されてきた。

学生時代はアルバイト三昧。

「一週間くらい空いとらん？人数が足りんで困つとつちゃん」

——いいわよ——

二つ返事で、チラシ配り・キャンペーンガール・大衆食堂のウエイトレス・バーゲン用プライスカードの付替え・デパ地下の試食販売・ポスターモデル（集合写真の端っこ）・生徒の傍らでコミック誌を読み耽る家庭教師などなど、とにかく来るもの拒まずである。

中でもシヨッパーズのインフォメーションガールはロングランだった。無人カウンターの横で明るく楽しくチラシ配りにいそしんでいたら、

「夏休みいっぱい居てくれませんか？」

と、これもなりゆきだ。

こうしてマツヤレディスとダイエービルに挟まれた専門店街のドア横で、迷えるお客さま相手にサービスピ精神を発揮しているところに、高校時代（筑紫丘）の後輩が立ち寄った。

「私、「エルフの集い」っていうところでアルバイトを始めたんですけど、辞めなければいけなくなったんです。長澤さん、もう一つアルバイト増やしませんか？」

たまには大学にも顔を出さなきゃいけない。しかし、後輩の困り顔に心が少し動かされた。

——週に3日くらいでいいの？——

「いいと思いますー是非、お願いしますー！」

入れ替わるように二人の男性がやって来た。森田さんと三井さん。身長差ほぼ30センチのお笑いコンビを彷彿とさせる広告マンたちだ。

「そこの喫茶店で待とうけん、時間がとれるごたつたら、ちょっと来ちゃらん？」
なんと押しかけ面接である。これが全ての始まりだった。

出張面接

「エルフの会員さんたちは皆んな一流企業に勤めようO.Lさんやもんね」

——オーエルさん？——

「時々パーティーのあるったい」

——パーティー？——

「要するに、会員さんたちのおもりばしてもらいたいとよ」

——おもり？——

二人は交互に「エルフの集い」が何たるかを説明しようとするが、発足して間もないせいか実態がどうにも不明瞭。

「会員さんに会報も出しようもんね」

——会報？——

「1号は出しとうけん、次号からはしてもらわないかんごとなるばつてん……長澤さんに出来るやろか？
それが心配たい」

後輩がクリアできたレベルだ。

——何とかなるでしょう……——

「ばつてん野崎ちゃんは見事やったねえ」

「うん、ほんに優秀やったねえ」

彼女の優秀さは今になって判る。勤務歴たかだか2〜3ヶ月のアルバイトにもかかわらず自分の代わりとなる人間、つまり私を引つ張り込んで、辞めていった。

エルフで十三年と五ヶ月、ガリヤで二十四年と四ヶ月、合算三十七年と九ヶ月の年月の中で私は、呆れるほど多くの仲間たちを見送ってきた。存続が危ぶまれるほどの集団退職も幾度となく経験した。そのたびに、こう叫びたい気持ちにかられたものだ。

——貴方の代わりに連れてきてから辞めなさい！——

机・電話・私

エルフ事務局の母体である西広とは西日本新聞やTNCを系列に持つ総合広告代理店だ。そのクライアントの一つにカワムラ家具があった。

カワムラの家具を買ってお嫁入り…当時はこんなCMがさかんに流れていたものだが、その販促のひとつに「アミカの集い」があった。未婚女性を会員にし、見込み客に取り込もうという仕掛けである。

それがどうしたいきさつか、西広にバトンタッチされ「エルフの集い」に様変わりした。しかし、「そげなこつ、やっとうヒマやらあるもんね!」

ということか、雑務をこなす専任アルバイトを必要とした。それが私だ。バイト料は月額5万円。大卒の平均初任給が10万円を超えた時代である。

ともかく広告会社の営業局の営業三部二課のいちばん端っこ、ひとつの机と一台の電話とひとりの私…それがエルフ事務局だった。

雑誌制作は普通に生きていけば身につく技ばかり

席につくとへエルフのつどい会報 1号が手渡された。さすが広告会社と言うべきか、会報というよりは新聞のB4折込チラシに近い。そこで勝手ながら次号はA3に拡大した。そして2つに折った。すると一枚の紙が、表紙＋中面2ページ＋裏表紙の計4ページだ。これでチョットだけ会報らしくなった。その翌号ではA4を一枚挟み6ページに、そのまた翌号では8ページに、そして12ページに…。

ところでこうした印刷物の制作には、取材する、記事を書く、レイアウトする、編集するなど特殊な技が要るように思われるが、それはない。日常の中で普通に身につく技だらけだった。たとえば作文・読書感想文・図画工作などといった幼い頃からの実習がある。また教科書・小説・新聞・雑誌・漫画・童話…つまり、目にした活字全てが教本となる。テレビ・ラジオ・映画などの娯楽にハマるのも街をブラブラ歩くのもけっこうな学習だ。友たちと遊ぶ時でさえ情報の受信・発信という豊かな実習に満ちている。

エルフではさらに、月一回のペースでパーティーが催された。会場は西鉄グランドホテルや全日空ホテル。ゲストには著名人も多かった。関口宏さん、田中健さん、大竹しのぶさん、タモリさんなどが記憶に残るが、宣伝キャンペーン等で来福のところをチョット立ち寄って頂いたわけだ。

司会はTNCの安東正春さんだった。会報ならインタビュールなんかもあるべき…と思った私は、出会う早々インタビューを申し込んだ。すると、

「では明日、番組収録が3時に終わりますから、3時にスタジオにいらしてください」と、なった。

こうして仕事効率劇的アップ

さっそく社内カメラマンのF部長に撮影同行を依頼した。ところがどっこい、

「勝手に決めなさんな！こつちにも都合があるったい！」

叱られた。しかしこの歯に衣着せぬモノ言いのおかげで、大事なことに気がついた。

——カメラマンの都合にいちいち合わせていたら、仕事にならない……

さっそく世界初登場で脚光を浴びていた連動ストロボ内蔵&オートフォーカス「ピッカリコニカ」をローンで購入。シャッターを押すだけで撮れることから「バカチョンカメラ」なんて差別的別名が実名より親しまれた時代である。

翌日午後3時、私は収録を終えたばかりの安東アナとTNCのスタジオに居た。

——この仕事を選ばれたきっかけは？——

さすが話のプロだった。このありきたりな質問をタネに、話をパンのように膨らませる。夢中になって聞き入った。ところが筆記が追いつかない…おかげでまた気がついてしまった。

——レコーダーがあればなあ……

ソニーがカップ・ブックスサイズの「カセットレコーダー」を出したのもやはりその時分。さっそくローンで購入した。

私のバッグはたちまち、レコーダーとカメラと原稿用紙と鉛筆と鉛筆けずりと消しゴムでパンパンになったが、おかげでいつでもどこでも仕事ができた。遊びながらも仕事ができた。効率は劇的にアップした。

ところがだ。なんとか二号発行にこぎつけた日、エルフの山が私を囲んだ。

——これ、どうするんでしようかねえ？——

「あ…それね、長澤ちゃんが会員会社に配ると」

——私が…配るんですか？——

業務内容に「宅配」が追加された。ちなみにガリヤの読者登録はピーク時でおよそ1万5千職域、それと比べれば当初はたったの40社コッキリた。3日もあれば届けられる量だった。

まずは封入作業。封筒の表に社名と住所とリーダー名を黒マジックで書き込んで会員人数分、つまりそこに勤務するOLさんの人数分を封入する。コア冊数が30冊、多い職場で70冊。それらを岩田屋の紙袋にギッシリ詰め込むと、両手に下げ、ご近所さんから配り始めた。

福岡銀行・野村證券・西鉄・グランドホテル・鴻池組…無駄の無い最短の動線だが、袋がカラになれば「回収」に戻り、また出かけるという作業の繰り返しである。

受付でリーダーさん（各エルフ会員職場の窓口さん）を呼び出しては、
——エルフの会報をお届けにあがりました——

と笑顔で手渡す。

「ご苦労様」

と受け取るリーダーさんたち。

ところが宅配途中で小雨になった。ズズズズズズツツ：紙袋が破れて中身崩落。横断歩道の真ん中で泣きたい気分になった。

おかげでまたまた気付いてしまった。

——自転車ならカゴも荷台もあるし、おまけに早い！——
その足で自転車屋さんへ飛び込んだ。ローンは効かなかったが、おかげで宅配はおろか業務全般の効率を激的に上げる好結果をもたらした。

そして広告営業が加わった

異変は、早くも2年目に訪れた。

— 広告がガラ空きなんですけど… —

「あ…そうやったね…ちよつと待つとつてよ」
また翌日、

— 今日は何頂きますか? —

「…ちよつと待つとつて」

さらに翌日、

— まだですか?! —

「あ…それね、Sくんに言うて」

一番若い営業マンだ。しかしSくんにはなにやら、押し付けられたような感があった。

— Sさん、入稿日が迫ってますので、急いでお願いします! —

「は〜い」

そして翌日、

— 未だですか? —

「…は〜い」

そして私はずいにキレた。

— いつまでグズグズしてるんですか! —

するとSさんのほうはもつとキレた。

「僕らは月一千万のノルマがあるとよー！ たった5万円の広告ばかりに行く時間やらあるもんね！ エルフの広告くらい、長澤ちゃんが自分で決めてこな！」

その夜、飲み仲間の内田博子さんにグチった。ちなみに某エルフ会員企業のOLさんである。

「私ね、広告まで取らなきゃいけないんだってさ。いやだよー営業なんて！」

泣きついたつもりがスルーされた。しかし後日、

「あの時はね、ユッコはなんて馬鹿なこと言ってるんだろって思ったの。営業ってものすごく大事なのに、ちゃんと営業してくれる人がいなきゃどんな会社も成り立たないのに、ユッコはいつたいナニ考えてるんだろって思ったの」

気持の芯に、ずっと残った言葉である。

広告とりのプロたちに見捨てられた…否、見捨ててくれたおかげで、「広告営業」が業務として追加された。つまりこの時からエルフは、自給自足への道をひた走ることとなった。

イギリスに行つて学んだこと

こうして私は營業ノルマをなんとかキープしながら、企画しながら、書きながら、撮影しながら、宅配しながら、遊びながら、「エルフのつどい会報」を発行していった。友人の渡米を知れば、

——滞在記を送つてちょうだい——

面白いテーマを見つければ、

——座談会しましょ——

シモネタ話に盛り上がると、

——文字にしなきゃ勿体無い——

「書きたい！」

「私も書く！」

「私もっ！」

——回し書きして「OLリレーポルノ小説」つてどう？！——

そんなこんなで4年ほどが経った。

——イギリスに行きたい……——

ところがエルフを辞める気マツタクなし。そこで、

——誰か私の代わりにやってくれる人いないかな？——

すると、

「私にさせてくださいー！」

さつそく某会員企業に勤務していたGさんが手を上げた。これまた偶然にも高校の一年後輩だ。

——ほんとうにいいの？給料4分の一になるよ——

5万円から10万円に激増していたものの、高給取りの彼女からすれば激減だった。

「いいんです。もうじゅ〜ぶん貯めてますから」

ちやうど退職準備中で、渡りに船のご縁だったらしい。

——来週からイギリスに行つてきます。不在中はこの人がやりますので、よろしくお願いします——

「…あ……」

——ご心配なく。仕事は全部教えましたから、大丈夫です——

そして、飛び出した。

当然ながら渡英資金はゼロ円。

「結婚の予定はありません。御祝儀の代わりにお選別くださいー！」

とお願ひしまわった結果百万円ほどが集まった。ポンド500円の時代である。それが往復航空券代を含む七ヶ月の滞在費というわけだが、すこぶる豊かな経験だった。豊かさにはマネーリッチとタイムリッチがあるが、少なくとも後者のリッチは満喫した。

しかしこの渡英経験がどれほど大きな学びとなったことか…もしこの経験が無かったら、今のフリー

ペーパー文化は無かったと断じていいだろう。ま、帰国してからの経験だけだ。

フリーペーパー誕生への原動力

「長澤ちゃん…話があるそばつてん、ちよつと来ちゃらん？」

帰国して三日目、森田さんが私を呼んだ。顔つきがいつになく渋いのが気になった。

「Gちゃんのことやけどね…いつまでおるとね？」

おっと、そう来たか！

——ずっと居ます。これからはGさんと二人でやっていますから、何卒よろしくお願いします——

「そらイカン」

——どうして?!——

イカン理由はカケラも見当たらない。もし見当たったら解決すればいい。

——二人でやっていきます——

すると森田さんが折れてくれた。

「どうしてもGちゃんば辞めさせとうないとなら、よかる」

しかし条件付きの「よかる」である。

「今の売上げのまんまやったらいかんとよ。売上げば増やさないかんとよ、わかっとうとね？」

子供に論すような口ぶりだ。

——わかっていますよそれくらい、もちろん増やしますよ——

ところが口ぶりが変わらない。

「なら長澤ちゃん、ちょっと訊くとばってんね、いくら増やせばよかつち思いようど？今までが月40万から50万やったろ？これば幾らに増やせばよかつち思いようど？」
なんだ、算数問題か。

——Gさんのバイト料が10万円増えますから、月に50万から60万ですよね——
ところがブー。

「やっぱ長澤ちゃん、いっちゃんわかつとらんやったつちゃね。Gちゃんが一人増えるとやったら、90万から100万にせないかんとよ」

なんと「給料の5倍増！」。

——…はい…解りました…——

これが、西広が私に求める「エルフスタッフ増員に関する絶対条件である」…として、理解した。

この数字の根拠は経営側に立てばよく解る。当人の給料以外に経営にはさまざまなお金がかかり、それを支えるのが営業だ。業種や規模によっては5倍どころじゃない。ただ、一人の増員につき「給料の5倍の売上増」は同時に、「達成できなければ解雇される」の恐怖観念となっていた。

スポットライト再び

こうして私に一人目の仲間ができた。和美人で知的な顔立ちながらも性格は大ボケ。おかげでエルフ事務局はいっそう活気づいていった。

「あの頃の私たちって、仕事遊びで遊びが仕事だったわよねー」

こう彼女が言うように、たしかに境界線が曖昧だった。その曖昧さにどっぷり浸かりながら、「イベント主催」「ラジオパーソナリティー」「テレビレポーター」…見よう見まねに何でもやった。

読者も広告主も友だちだった。何ごとかあれば直ぐ駆けつけた。宮沢賢治の詩に倣えば、雨二毛負ケズ風二毛負ケズ 東二失恋シテ泣イテル人アレバ行ツテ慰メテヤリ 西二カレシガイナイトナゲク人アレバ行ツテ紹介シテヤリ 南二結婚式アレバ行ツテ司会シタリスピーチシタリシテヤリ 北二サンカク関係ヤフリンデ争ウ人アレバ行ツテツマラナイカラヤメロトイヒ：

まあほとんどが恋愛沙汰、若かったのだ。しかしそんなこんなの4年を経て、彼女は独立を決意した。ライターとしての一本立ちである。

「長澤ちゃんーよか話があるっちゃけどね、すぐ会議室に来ちゃらん？」
西広から久しぶりにお呼びがかかったのは、そんなココロ寂しい時だった。

3ヶ月で3千枚の信販カード集め

広告を「賭け」と言う人がいる。いかに周到に準備し発信しようと、お天気ひとつでぶち壊しになつたりするからだ。

「必ずご希望の結果を出します！」

嗚呼、そう言えたらどんなにヨイことか…。

ところが、誰かがそれを言った。某信販会社を相手に、

「必ず3ヶ月で3千人のカードホルダーを獲得します！」

…と。確約の根拠はエルフ。当時120社に自然増していた会員企業の3000名の会員、そこに目をつけての企画だった。

——え〜?!——

ところが、

「長澤ちゃん独りやつたらたいへんやろうけんね、何人雇ってもよかとよ」

これが私の殺し文句だった。

——…本当に…何人雇っても…いいんですか?——

「よかよ。3ヶ月で3千枚集めてくるっちゃけんね、人手はいくらでも要ろうもん」

——…わかりました!——

友人に声をかけると、たちどころに7〜8人が集合した。

三千枚にゴール!

エルフ会員カードキャンペーンは食事会でスタートした。各社のリーダーさんを片っ端からレストランに招待し、食事とお酒を振る舞いながら和気あいあいとした中で進行した。もちろん信販カード申込書というお持ち帰り付きだ。会員10名の職場には10セット、20名の職場には20セット、30名の職場には30セット、40名の職場には40セット、50名の職場には50セット……たぶん皆んな、ドン引イタ。

少し日を置いて申込書の回収に出向くのだが、結果は惨憺たるものだった。

「はい、5人分です!」

「……こちらは……30名いらつしやつたでしょ?」

「ゴメンナサイ!これが精一杯。『カードはこれ以上持ちたくない』って言う人が多くて……」

「はい、7セット」

「……こちらは……50名いらつしやつたでしょ?」

「それがね……」

だが引き下がれない。

「もう一度お願いしてくれない?お願い、お願い、お願い!」

「情けにおすがり作戦」にシフトした。すると有り難いことに、

「友達の会社を紹介するから申込書をそちらにも届けてください。カードのことはもう私から説明していただけますから」

驚いたことに、ほとんどの職場が他社の友人たちを紹介してくれた。おかげで会員企業数は、たちまち10倍に膨れあがった。

そして契約満了日の六時チョット過ぎ…私たちは、まさにギリギリのゴールを決めた。

ほどなくミセスエルフが誕生した。

「会員組織を持つことは素晴らしい！ミセス版のエルフも作らなくっちゃ！」

…とまあ、そういうことだろう。

そのシンボルとして本多和子さんがハンティングされた。RKBの人気アナウンサーとして鳴らした時代もあつてか、いわゆる主婦層のカリスマだった。

エルフ事務局は事業部に格上げされた。事業部部长にはカードキャンペーンを牽引した阿部さんが就任。そして私たちはお気楽にも、カード集めから開放されたことをひたすら安堵し、ハシヤイでいた。

信販カードを半年で一万枚集める?!

「長澤ちゃん、ちょっと話があるとはってん」

阿部部長から早々にお喚びがかかった。

「半年で一万枚集めることになったけんね」

……………

例えるなら、ロッキーが15ラウンドの死闘を制し、

「エイドリアーン」

と叫んだところで、またコーンとゴングが鳴ってドラゴ登場といったところか…。

——無理です、出来ません！——

「…やっってください」

——出来ません！——

それでもゴングは鳴り続けた。

「せないかんと！」

——無理です！できません！——

なんと言われようできないものはできない。それが判つてやっと引き下がってくれた…と思つていたら、

「長澤ちゃん、ちよつと…」

一時間ほどして、また喚ばれた。

「よかね長澤ちゃん。会社が『する！』て決めたとはさつちせないかんと。出来んて思うとなら、どげんしたら出来るかて考えろが仕事。どげんしたら半年で1万枚集めきるか、その方法は考えて実行する！それが長澤ちゃんの仕事やけんね、断われんとよ」

…先の一時間は作戦タイムだったらしい。

私たちはそれから、某信販会社の本社に一泊二日で表敬訪問した。その道中で思い出されるのは武田部長のヤンチャぶりに尽きる。当時の西広にはユニークな社員が多かったように思うが、この人のユニークさも群を抜いていた。

「あんた、いつまでこげな小さいことばしようかね？」

が口ぐせで論客ながら荒唐無稽…そう言えば、こんな「兄ちゃん」を持った弟の苦労話が書籍になっているようだ。週刊誌でそのサワリを目にした時、共感のあまり、なつかしさがこみあげた。

エルフスタッフ全員解雇命令

一万枚カードキャンペーンが始まると、「ご希望の映画鑑賞券プレゼント」とか「百万本のバラコンサート招待券プレゼント!」とか、ありきたりながらも私なりに考え、実行していった。ちなみに「百万本のバラ」は加藤登紀子さんのミリオンヒットとして知られるが、実はその3年も前から小田陽子さんが歌っていた。

女優に恋した貧しい絵描きが家売って町じゅうのバラを買い込み、彼女が泊まる宿の窓下の広場を無数のバラで埋め尽くした…。浮世離れた歌詞に柔らかな旋律、加えて圧倒的な歌唱力である。有線放送で耳にした途端、ズキーンとハートを射抜かれた。

——大ヒット間違い無し!招待券希望者は多いはず!——

…自信はあったのだが…。

そして1985年8月31日…ついに、運命の日が訪れた。

「長澤ちゃん、ちょっと会議室に来て」

重い空気で阿部部長が口火を切った。

「あのアルバイトの女の子たちね、今月いっぱいであらんことになったけんね」

「…え？」

今月いっぱいとは今日いっぱいのことだ。

「皆んなに『明日から来んでよか』って、今日中に言うて欲しいと。長澤ちゃんは残つて後始末ばしちゃんしやい」

——後始末？——

「それとサンパレスのコンサートやけどね、あれは中止してください」

——どうしてですか？——

「今日で半年になるやろが。ばってん2千枚しか集まっとらんやろが。契約不履行たい。S審判からもうお金は出らんもんね。やけん今日いっぱい辞めてもらわないかんと」
会社側としては苦渋の通達だったのだろう。

しかし怒りがこみ上げた。「失敗は成功の母」なら「成功は失敗の父」だ。成功にも要因があり、その検証を怠れば失敗に至る。カードキャンペーン第二弾の成功要因は「情」に他ならず、それを最後の一滴まで使い果たした直後の第二弾だった。せめて一年の猶予は必要だった。

——解雇はしません！——

「いや困ります。今日中に、必ず解雇してください」

——解雇はしません！——

「今日中に解雇してください」

——解雇なんかしません！——

押し問答になった。とにかく仲間たちを守らなきゃいけない。定収入が得られるようになったことから親もとを離れ、自立したばかりの者もいた。

「解雇してください」

——しません！——

「しなさい！」

——しません！——

フリーペーパー誕生

部長も疲れてきたのだろう、命令口調があきれ口調にシフトした。

「なら訊くばつてんねえ、誰があの人たちの給料は払うと？ スポンサーからはもう1円も出らんとよ、どげんする気ね？」

どげんもどげんも策は一つだ。

——エルフ会報に、広告を増やして、払います……——

なんのこったない。イギリスから帰国直後、森田さんから伝授された「採用の鉄則」の実践である。

一人の増員につき、広告売上を給料の5倍額増やせば済むことだった。

ところがどうしたことが、

「長澤ちゃん…それは無理よ、今まででも泣きながら広告はとつてきよつたらうが？」

どこで目撃したのか憐れむように諭してくる。ま、いずれの業界でも照る日あれば曇る日ありだ。

「今、解雇しとつたらラクよ。今のうちに解雇しときんしゃい、悪いことは言わんけん」

——解雇はしません！エルフ会報に広告を増やして、給料を払います！——

「無理で言いようが」

——無理じゃありません！解雇はしません！——

「やめときんしゃい」

——やめません！解雇はしません！コンサートもやめません！——

「…なら長澤ちゃん、給料払えん時はどげんするとね？」

とうとうキレた。

——そんなときやあく私のおらん時たい！——

…フリーペーパー誕生の産声だ。

中学まではツツパリの湘南ガール。関東弁のなかなか抜けなかつた私がなぜか、コテコテ博多弁で怒鳴りあげ、椅子を蹴るようにして席を立った。

エルフ炎上

——エルフ会報に広告を増やして（給料）払います！——

とは言ったものの「広告枠を埋める」というこれまでの発想では無料ページまで増えることから、制作費や印刷費まで増えてしまう。要は最小の経費と最小の労力で最大の売上を獲得することだった。

さて、そうするには…

——誌面全部を広告にしちゃおう！——

迷いは無かった、と言うか、迷っているヒマが無かったのだ。

部屋に戻るなり指示を出した。

——信販カード集めは今日で終了しました。いよいよ皆さんにも、エルフ会報の制作に関わっていただく時がやって来ました。広告をどんどん取って来てください！広告こそ、誰にも役立つ優良情報です。誌面は今後、広告だらけになりますが、表現を工夫すれば素晴らしい情報誌になるはずです！——

ところで無料の雑誌イコール、フリーペーパーと思われるが、少し違う。無料の発行物なら当時からいくらでもあったのだ。しかしそこに掲載される広告は、記事を引き立たせる脇役でしかなかった。その脇役を価値ある情報として主役の位置に押し上げたもの、それがフリーペーパーだと私は定義する。フリーペーパーの主役はあくまで優良かつ有料なる広告。他は、どげん面白かろうと脇役だ。

エルフの誌面が激変した。ポエムもメルヘンもインタビューも、もちろんOLリレーポルノ小説も姿を消し、広告がそれらと交代した。

そして、エルフが炎上した。

はじめに怒りだしたのは広告主だった。

「こんなもんに広告出した覚えは無いっ！」

広告の在るべき場所は記事下もしくは記事横。記事が面白ければ広告にも目がいくという考えだから、混乱されるのは、ごもつともだった。

次に怒りだしたのは読者だった。

「読むところが無くなってつまらなくなりました！」

「ポエムとかエッセイとかいっぱいあって楽しかったのに、いったいどうしたんですか?！」

「もう会社に届けなくて下さい! こんなの、誰も読みません!」

中でも最多は、

「すみませ〜ん、カードの解約をお願いします〜す」

なんと、信販会社の発行物と思われてしまっていた。

しかし、いちいち気に病んでいるヒマは無い。目的は仲間たちの雇用の継続、つまり売上の急激アップだ。それさえクリアすればいざいざなんとかなる…なんて思っていたが、灯台下暗。

あろうことか、怒りのトドメは仲間たちだった。

「こんな仕事、やってられません!」

…と、まず一人がキレた。すると、

「私も…すみません、辞めさせていただきます」

「私も…」

「私も…」

「私も…」

「私も…」

「すみません、私も…」

一夜にして、全員が消えた。広告ダラケのエルフとなって、わずか三ヶ月目の出来事だった。

タスケテ…SOS

デスクに突っ伏して倒れ込んだ。検温するときつちり四十度。しかし入稿を目前に寝こむわけにはいかなかった。文字校正、写真校正、エトセトラ…仕事だけは、たくっぷり残していつてくれたのだ。

朦朧としてデスクに向かううちSOS状態に。しかし社内発信するとソレミタコトカに…と草葉さん（故）に電話した。イベントでタッグを組んでいた会社（福岡企画）の社長さんだ。

——タ…ス…ケ…テ…

救助は迅速だった、出かけるついででもあったのだろう。

「うんうんうん…うんうん…うんうんうん…」

階下の喫茶店でコーヒーを飲みながら、頷くだけ頷くと、

「じゃっ、仕事のあるけん行くよ。頑張るやい！」

とだけ言い残してソソクサと去った。

なんだか、絶望感やら焦燥感やら涙やら鼻水やらを、ゴミ袋で受け止めてポイされた感じだったが、気持ちをスツカラカンにしてくれたおかげで意識朦朧の中、また元気が満ちてきた。

元気になりたければ元気の居場所を作ること、ヤル気になりたければヤル気の居場所を作ること。まずは気持ちを空っぽにすることからだ。

草葉さんは若くして亡くなられたけど、この日の記憶の中で、今もカッコ良く生きている。

立ったまま仕事出来る？

しかしこの時の出来事はトラウマとなつて部下に甘しい上司となつた。また、面接に来てくれる人は拝みたいほどありがたく、

「台否につきましては後日こちらからご連絡いたします」

…なんてモツタイはつけず、その場でどんどん採用した。パーティーションで仕切っただけの部屋はたちまちギューギュー詰めとなり、それでも、やって来れば採用した。

こんなエピソードもある。

「私、ここで働けんかいな？」

エルフの某会員企業に勤務していた女性だが、そこを退職して就活中とのこと。

——どうしてうちに？他の会社の面接も受けたでしょ？——

「入ろうと思つとつた会社があつたつちやけど…『今は席が無い』つて断られたと…」

〈席が無い〉を、当時の私がどう理解したかは次の台詞で明白だ。

——うちもね、席が無いのよ…席が無くてもいい？貴女、立つたまま仕事出来る？——

冗談ではなく真剣に訊いた。すると彼女は、

「うん」

と答えた。たぶんこれも真剣だ。

——じゃ、明日から来てね——

とは言つたもののやはり気になつて気になつて、終業寸前、ブーイング覚悟でこう指示を出した。

——明日から仲間がまた一人増えます。ところがご覧のとおり、机を増やすスペースがもうありません。そこで、ここに在る机を全部捨てて、代わりに長テーブルを置きます。長テーブルだったら、みんなでいっしょに座れるでしょ？——

ところが清水さんが、こんな素晴らしいアイデアを出した。

「キャビネットを捨てましょうよ！これ捨てたら机イッコくらい増やせるんじゃないですか？！」

——貴女つて！なんて頭がいいの！——

感動した。アイデアではなく、気持ちに感動した。

キャビネットを開くと、資料やら道具やらがこぼれ落ちんばかりで、天板に積み上げた書類も崩れ

落ちんばかり。帰宅モードにあった仲間たちの足は、降って湧いたこの整頓作業に深夜まで引き止められた。

こうして彼女はエルフの席を獲得したものの、2年ほどで退職。かなり経ってからスキップというフリーペーパーを創刊した。

エルフにはそれからもスタッフはどんどん増え続けたが、へ一人増につき給料の5倍額アップを素直に課してきたおかげで、売上は上昇の一途となった。

「いったい、いつまで売上を上げたら気が済むんですか!？」
仲間のひとりが声を荒げて私の机をドンツと叩いた。

——さて…いつまで…かな…?——

返答に窮した。答えようが無かったのだ。

仕事を求めて人が来れば、イキイキ働く姿が見たくなる。こんな例え話は妙だろうが、お腹を空かした子猫を見れば抱き上げて連れ帰るのと、さほど変わりは無かった。

職場には人がどんどん増え、飼育禁止のマンションには、猫がどんどん増えた。

こんなモンが世の中に存在することが許せん！

彼女たちは実によく働いた。見よう見まねに、広告とりながら、企画しながら、原稿書きながら、デザインしながら、イベントしながら、ついだに写真まで撮ってしまうマルチ集団になってくれた。しかし言葉をかえれば、一芸に達することなき素人集団である。そんな集団が作るエルフに達人の手が加わるようになったのはたぶん、この時の撮影がきっかけだ。

現場に着くとすでに別媒体の撮影が進んでいた。四方に立つ照明スタンド、料理を覆うトレース紙、レフ板を支えるアシスタント、脚立のてっぺんから身を乗り出すようにしてシャッターを切るカメラマン：私たちはその横に布を敷くと、撮影済みの料理を並べてシャッターを切った。

絞りもシャッタースピードも独学でクリア、オートフォーカスを卒業しストロボ内蔵の一眼レフ。いっぱいのカメラウーマン気取りだったのだ。ところが後日、

「日本浪漫座の写真ですが…『使えないので、こちらの写真を使ってください』って言われて…預かって来ました」

：ノックアウトだった。

写真は光が命。室内における撮影なら照明の量、照射角度、反射、吸収など、微妙な光バランスが物を言う、まさに職人技の世界である。それらが省略されて印刷物となれば、魂の抜けた広告となり、集客効果はダウンする。とにかく写真はムツカシイ。魂の抜けた広告となり、集客効果はダウンする。とにかく写真はムツカシイ。

この学びをきっかけに、撮影はプロカメラマンへとシフトしていった。

デザインもわかり。パソコンでチャチャッとやれる今とは違って当時はオール手描きだ。プレゼンともなれば高度なレタリングやイラスト・カットの技術が要求された。そこで友人を引き込んだ。清子さん：若い彼女の才能は確かなものだった。

おかげでエルフ誌面が垢抜けして広告効果も上昇の一途。ヨカッタヨカッタ：と思っていたら、「こんなモン、世の中に存在することが許せん！」

「キミたちはいいたい、恥というもんを知らんとか？」

「こんなハズカシイお仕事を、いつまでお続けになるつもりですか?!」

見かけは立派な本、ところが中身は広告タラケ：雑誌と思って読み始めたら広告を読まされていたことにハタと気づいてアタマニキタ、というわけだろう。

「…ハイ…ハイ…」

暗い表情で受話器を置く仲間たち。

———この電話、どなたからですか？———

「…いえ……………」

———また…抗議ですか？———

…笑ってはくれたが、彼女たちは傷ついていった。

「売れる本を作りたいですね…」

そんな言葉がよく、漏れ聞こえてきた。

慰安旅行は総勢でハワイ

この記憶は、エルフが広告タラケに転じた年の忘年会に遡る。もう一軒付き合えということでおしゃれなバーに立ち寄った時のことだ。黒御影石のカウンターがコの字形に配置された店で、たまたま隣に座ったのが件の阿部部長だった。

「長澤ちゃん…給料のことやけどね…」

酔ってはいいても人柄はチョク真面目、たぶん話題がなかったのだろう。

「売上利益の□%を長澤ちゃん。△%は他のスタッフに分けるごとにするけんね、それでよかる？」

———ありがとうございます———

待遇についての話はこれが最初で最後。□とか△とかの数字についてはその記憶すら無く、だからと言って問うことも無かった。阿部部長がエルフの存続を認めてくれた、西広がエルフの存続を許してくれた：朦朧とした頭がホツとしていた。

年が明けると、ちょっとした騒ぎが起こった。

「どうして先月より下がってるんですか?!」

あ、こういうことだったのか…と、阿部部長の言葉を、初めてそこで理解した。

——売上げに応じて支給額が変わることになったみたいなの。だから、がんばろうね——

「…は〜い…」

また少し経つと、

「売上げは先月と同じなのに、どうして給料が下がるんですか？」

——なるほど…不思議ね——

問い合わせると、

「経費が増えましたから」

——なるほど——

それからの説明はラクだった。支給額が下がれば、

——先月は経費がそうとう増えてるみたいですね——

ついでにハツパもかけた。

——だから皆さん！もつともつと頑張りましょっ！——

とにかく仲間が増えるたびに「給料×5」の売上げ増を単純に課していったおかげで、□%と△%で割り出される給与支給額は不思議なほど右肩上がりだった。

ちなみにエルフでの最後の年つまり1989年は、西広での仮住まいを出て新築オフィスに移転。

慰安旅行は総勢でハワイだった。後に聞いた話だが、私は西日本新聞社グループにおける一番の高級取りになっていた…とか…？

意味不明な出来事

1989年春、エルフのオフィスが本社から天神三丁目の新築ビルに移転した。上下階合わせて90坪のゆつたりとした空間には、専用ホールや会議室まであった。

ところがそのゆつたり空間にカン高い声が響き渡った。休日返上の引越しが終わって、そろそろ帰ろうとした時である。

「え〜つ明日ですか?!」

「そんなこと聞いてませ〜ん!」

「どうして私たちに報らされなかつたんですか?!」

「招待客はどういう選考ですか?!」

「私たちのお客さんは招べないんですか?!」

自分たちの事務所のお披露目パーティーがどうして自分たちには知らされなかつたのか…これが憤慨の理由だった。

翌日夕刻、ホールに料理と酒が持ち込まれ、知った顔や知らない顔が和やかに杯をあおっていた。S社長の挨拶に続いて何人かが挨拶した。ちなみに当時の西広では、社長をはじめとする役員が多くが西日本新聞社からの天下りであり、S社長もその例外ではなかつた。

お腹がいっぱいになったところで書きかけの原稿が気になってきた。場の空気を読むと、ありがた

いことに「消えても大丈夫」と極太文字で書かれている…コソツとデスクに戻った。

原稿に集中していると、誰か近寄る気配がした。本社のU次長だ。コワモテながらもダンディズムを漂わせ、寄り付き難いオーラを放つ男だ。この人もこうしたパーティーが苦手なんだろうと無視している。

「長澤ちゃんの気持…解るよ」

ポツンとひとこと言い残して、消えた。

憐れみたつぷりの言葉に、

「…今のなに？」

意味不明だった。

しかしこの意味は、ずっと後になって明らかになった。

エルフを独立した会社に！

その年も押し詰まった1989年12月上旬…

「相談があるっちゃけど…今からちよつと出てこれん？」

阿部部長から喚ばれた。指定された喫茶店に行くと、部長と並んで本多和子さんの姿もある。

席に着くなり虚を突かれた。

「ガリヤ事業部を独立した会社にせないかんて思いようだよ。長澤ちゃん、同意してくれんね？」

「…どういふことですか？」

「…ミセスエルフに…ポーナスの出らんかったとよ…」

「…私たちは…頂きましたけど…」

むしろ、お二人の憔悴した様子が気になってきた。

「ミセスエルフは…単体としては赤字やもんね…」

「でも、事業部としては黒字でしょ？どうして出ないんですか？」

「そうたい…あの人たちは家族も持つとうしね…長澤ちゃんはエルフ事業部が西広に今、幾ら利益ばあげようか知つとつね？」

知らなかった。関心がないどころか、考えたことすらなかった。

「…今月やら600万よ」

「…へ…」

「長澤ちゃん…エルフは西広が育てたよね？違うね！西広は何もしてくれんやっただよね！」

…それは違う。森田さん、三井さん、満生さん、武田さん、狩野さん、藤江さん、吉野さん…みんな面白かったし温かかったし、かく言う安部部長の温かさこそ格別だった。そんな人々に包まれていたからこそ、こんな私でもやってこれたのだ。

「事業部が赤字やったらボーナスが出らんでも仕方ないと。ばってんくん利益ば出しようやないね！やったらミセスエルフば育てるとに少しくらい出してもよかろうもん？今はミセスエルフば育てる時やるも？事業部はこげん利益ば出しようとして、西広はなしそげんせんかね？」

そこに本多さんが口を挟んだ。

「安部部長は、ご自分の貯金を崩されて、ボーナスを払われたんですよ」
これが効いた。素直に共感を覚えた。

阿部部長は傍らのカバンから書面を取り出すと、

「こればちよつと見てんしゃい、西広が出したエルフの今後の売上げ計画書やけどね…」
なんと、それまでと同じ急勾配の上昇曲線が、先の先の先の先々まで続いていた。

信販カード集めの記憶が蘇った。あの時の成功と失敗に理由があったように、エルフの成功にも理由があった。その理由をひとつとして知ろうとせず、またしても愚かなプランが動き出していた。

——わかりました——

エルフを守りたかった。

存在の消滅

それから10日ほど経った1989年12月21日、私たちはいつもながらの朝を迎えていた。

——皆さん、1月号入稿、お疲れさまでした！さて今日は大事な発表をいたします：驚かないでくださいね。実は昨日、エルフをきちんとした会社にするための上申書を、阿部部長が西広に提出いたしました！——

つとめて穏やかに、つとめて笑顔で話すことを心がけた。

——これから会社との話し合いが始まります。そのため、社内が1年くらい、少しガタガタするかもしれません……

一呼吸して皆の顔を見ると……シラ……

——でもね、皆さんが心配する必要は、ぜんっぜん無いですよ。2月号に向けて、今日からまた頑張りましょうね！——

オドロキ無し、質問無し。ウケない芝居を演じた役者の気分だった。

次なる報告相手はH局長、エルフの移転にくつついて来たオエライサンだが、こちらでの舞台は幕さえ上がらなかつた。

——H局長、おはようございます——

「……………」

虚空を睨んで微動だにしない。

——H局長、おはようございます！——

「……………」

…しかたなく本題に移った。

——これから、エルフを独立した会社とするための話合いが行われます。H局長！どうかご協力、よろしくお願いいたします！——

やはり微動だにしない。が、続けた。

——話し合いの会議には、どうか私も出席できますよう、お力添えをお願いいたします——
丸顔&濃い目鼻のニラミ顔はまるでダルマさん。しかし私たちのよき理解者だったはずが、これはいったいどうしたこと？

——なぜ黙ってらっしゃるんですか？…何かおっしゃってください！…どうのことですか？…——
何を問いかけても、どう問いかけても眉ひとつ動かさない。それでも問い続けた。問いて問いて問いて問いて…

——まさか『荷物をまとめて出て行け』ってことですか？——

このステバチな問いかけが、初めてウケた。

「もう、遅いとよ。もう、済んだとよ」

それだけ言うと、ダルマさんの目が、ス〜つと涙を流した。

やっと自分の置かれた状況が見えてきた。ダルマさんが意味していたのは、私という存在の消滅…消滅したから見えない聞こえない。そこにはもう存在しないという、幽霊のような私だった。

しかもこれについては何のご沙汰も無い、つまり解雇にすら及ばなかったようだ。エルフにおける私の存在は、初めから無いものとして消されていた。

席のほうに目を移すと見馴れぬ男性たちがウロウロする。かたやミセスエルフ席は空っぽだ。昼頃になって、ようやく姿を見せたスタツフが言った。

「私たち、皆んな、クビになったとよ」

そこにはなんと、正社員であるはずの阿部部長までが含まれていた。

部下たちの幸福を真剣に思い、会社の発展を真に願ひ、捨て身の挑戦をした男がなぜか、即日の解雇となっていた。

なんだかホロコースト

「バカやん、他にやり方があつたらうもん」

阿部部長についてそう評する人もいる。しかし他のやり方はあつたのだろうか…。

曖昧だったものが、四半世紀を経た今ようやくくクリアになる。

見舞いがてら部長のご自宅を訪れた時だ。

「長澤ちゃんは知らんやつたらうけどね…役員会のたんびに『どげんして長澤は追い出そうか?』って、よう話し合われよつたとよ…」

このトンデモ情報に私が、どれほどビックリしたことが。

しかし、思い返せば合点がいく。たとえばオフィス移転パーティーにおける不自然なネグレクト、そしてU次長から受けた意味不明な憐れみ…すでにこの時、追放へのカウントダウンは始まっていたのだろうか。

やがて上申書のサインに格好の引き金を見つけると、そこに指をかけて即刻抹消。ところがあらんことか、阿部部長、本多和子さんからミセス・エルフのスタッフ全員、さらにヘミセス・エルフという、未来ある媒体までを巻き添えにした。なんだか（ビジネス界の）ホロコーストだ。

しかしエルフスタッフには正反対の指示を出していた。次の編集長が指名され、
「これまで通り、もしくはそれ以上の待遇を約束するから、全員残るように！」

朝礼の席で、誰ひとり驚いた様子を見せなかったのは、そのためだった。

デスクを片付ける私に、阿部部長を通じてお達しらしきものが初めて届いた。

「長澤ちゃん、色校は済ませて出て行くように…」

色校…つまり新年号印刷の最終確認作業である。こればかりは、新米編集長には無理な仕事だった。

阿部部長はその後ミセスエルフを引連れ「フェーム」を創刊。しかし持病を悪化させ他界…あの時
ミセスエルフしか口にはなさらなかったけど、おそらく、私を救う策でもあったのだ。

遅すぎる気づきでしたが、阿部部長、ありがとうございました。

ふんやん西広

まだ肝心の謎は解かれていない。なにゆえそうまでして私を叩き出したかたかだ。思い当たるフシは…実は、無いでもない。

1万枚カードキャンペーンの失敗でへもう給料が出せないから今日じゆうに全員解雇！長澤さんは後始末！を經驗してからの私は、本社から提示される企画には、厳しいチェックを入れるようになっていた。

——これは、できません——

——この部分は変更してください——

——これは喜ばれるかもしれませんね、よろしいですよ——
うっかり引き受けたら会員さんにまた迷惑をかける、エルフがまた潰されてしまう…そんなこんなのも予策として、そうしていたに過ぎないのだが…。

出る杭は叩かれると言うが、いずれにしろ会社組織の最下位に位置する非正規社員の身分としては、出過ぎた杭とみなされたのだろう。しかし出る杭と見て叩くか、伸びる芽と見て育むか…そりゃ絶対、後者がいいにきまつている。

しかし、西広は私に最高の環境を与えてくれた。「何もしてくれんやったよねー」なんて阿部部長は言ったが「甘えさせなかつた！」と言い替えればニユアンスは激変する。「獅子の子落とし」よろしく崖か

ら真つ逆さまに突き落としてくれた。それはそれでよかったのだ。

ただ惜しまれるのはS社長をはじめとする上層部とのコミュニケーション不足である。不足どころじゃない、皆無だったのだ。全ての原因はそこにある。

西広は、今も私のふるさとです。

コッソリ説明会

1989年12月23日土曜日、仲間たちからコッソリ会議室に喚ばれた。

「どうしてこんなことになったのか、私たちにもちゃんと説明してください！」
可哀想に、彼女たちはパニックだったのだ。

パニックなら私も負けてはいなかった。雨の日も風の日も風邪の日も腹痛の日も、慈しみ育てたエルフである。その愛しいエルフをいきなり取り上げられたショック状態の私に、説明なんてムリムリムリ〜夢なら早く醒めて！

そもそも上申書のサイン程度のこと、ナゼ有無を言わさぬ叩き出し理由に？しかも求めたのは「話し合い」で、交渉に「1年はかかる」との予測もあった。さらに交渉にあたった阿部部長という人物は、簡単に人の逆鱗を買うような男でもなし…いちばん解っていないのが私だった。

そこで私はへなげ上申書にサインしたか…その一点に絞って、説明会に臨んだ。

——私は、この仕事に無限の可能性を感じてきました。身につけてきた能力・知識の全てが活かされる仕事だからです。見たこと、聞いたこと、楽しかったこと、嬉しかったこと、悲しかったこと、腹が立ったこと、困ったこと、感動したこと…それらの経験の全てが発揮できる仕事だからです。ところが最近ちよつと背伸びすると、天井に頭がつかえるような感覚がありました。『君たちはここまでだ！』って押さえつけられるような感覚です。私はこのエルフを、皆さんの力が、思いっきり自由に、伸び伸

びと発揮できる職場にしたかったんです……

週が明けて12月25日、月曜日の朝だった。

「編集長！」

振り向くと、八重歯を見せて笑う村田さんがいた。そして大声で言った。

「私たち、長澤編集長について行くことに決めました！」

……と、ここまではよかったのだが、

「この荷物、どこに運ばいいんですか？」

……オフィス？…決めてない……

オフィスどころか心の準備すら無しの五里霧中に彷徨っていたことには、なぜか誰も気づかなかった。

「じゃ、天神界限で探してくださいねっ！私たちの仕事はやっぱり天神界限ですから！」

仲間たちが私を取り巻いた。

この日、ほぼ半数の仲間たちが退職の意図を表明した。去る者と残る者に分れはしたものの「色校」という最終作業の中で、エルフはいつもの活気を取り戻していた。

たまたま入稿に間に合わなかったページが見開きで空いていた。もちろんこれを埋めるのも私の責任だ。よって、読者や広告主たちに黙って去るのは失礼との純粋な礼儀心から、そこを〈挨拶文〉として私を含める12名の退職報告ついでに、新たなフリーペーパー発行のPRをした。

エルフ新年号はその年が明けて直ぐの十日、予定通り発行された。しかしこの挨拶ページに気づいた西広では、かなりの騒ぎになったらしい。

だいじょうぶだよ…だいじょうぶだよ…

それから慌ててオフィス探しにかかったわけだが、これが大変だったのなんの。

——天神界限で一番安い物件を紹介してください——

不動産屋に片っ端から問合せるも、家賃30万円＋敷金10ヶ月が最安値物件ときた。

——マンションの一室でもいいんですが……

めいっばいの譲歩のつもりが、

「無理ですね。マンションを事務所代わりに使われるというのは、家主さんが嫌われるんですよ」
時まさに不動産バブルのピーク、私はこのあたりで、すっかり青ざめた。

身体は気持ちより正直だった。まず腎臓だ。血液濾過の仕事がしんどくなったようで、白い便器が真っ赤に染まった。それにならって心臓も悲鳴をあげだした。

忘れもしない、場所は西鉄グランドホテル横から昭和通りに続く通り。現在ナグモクリニックの入るビルの通りだが、ちょうどそこに差し掛かった時だった。ドッドドッドツツ…激しい動悸に足を止めた、というか動けない。

——ここで…行き倒れて…死ぬのかな私……

と、倒れかかったその時だった。

「ゆっこ……ゆっこ……」

頭の中で、誰かがゆっくりと話しかけてきた。

「だいじようぶだよ……だいじようぶだよ……だいじようぶだよ……だいじようぶだよ……神様、仏様、お釈迦様、キリスト様、マリア様、天使様、ご先祖様、守護霊様、背後霊様、指導霊様、みくんなユツコのこと、守ってるからね。だから、だいじようぶだよ……だいじようぶだよ……だいじようぶだよ……」

声はまだ続いた。

「今はね、すごく大変に見えるけどね、見えてるだけだよ。ほんとうは全部うまく行ってるから、だいじようぶだよ。うまく行ってるようにはぜんぜん見えてないけど、見えてないだけだよ。ぜんぶうまく行ってるから、だいじようぶだよ……だいじようぶだよ……だいじようぶだよ……」

これはたぶん心の声、セルフメデイテーションとでもいうのだろう。ここで倒れたら職場を捨ててまでついて来てくれる仲間たちはどうなる？倒れたら絶対ダメダメ！という必死の思いが、勝手にこんなものを創り出したのだ。

ところが脈拍が正常に戻って硬直もとれ、足を一步を踏み出した……と、その時だった。

「この先を左に曲がったところに不動産屋があるよ、そこに部屋があるよ」

……と、声が続いた。

これだけは今も不思議でならない。導かれるように昭和通りを左折し五十メートルほど行くと、夫婦で営んでいる小さな不動産屋さんがあった。

—— 独立するので事務所を探しています。机は12コです。あまり予算がありません。希望は天神界限です！——

それだけをイッキに伝えると、

「いい時に来られましたねえ。大名のビルアパートですがね、6畳の部屋がひとつ空いてるんですけど、27日には隣の部屋も空くんですよ。2室とも借りればいいんじゃないですか？家賃は4万9千円、敷金5ヶ月。これから見にいけますか？」

—— お借りします！ありがとうございます！ありがとうございました！……！——

1989年12月27日、私たちは豪雪の街に飛び出した。その日については序章の通りだ。

ガリヤの名前はジュリアス・シーザーのパクリ

年が明けて1990年1月5日、オフィスは〈ネーミング会議〉で幕をあげた。それぞれが真剣に考えてきた名前は甲乙つけがたく、なんとも収拾がつかない。

ちなみに私が考えた名前はコスモス。せっかちにも正月返上で営業に飛び回り、この名前で何本か契約も決めていたため、他の名前に決まるとちよつと困るのだった。

ところがだ。

「ガリヤはいかがでしょう?」

少し遅れて瀬川ゆかりさんが声をあげた。

「ガリヤ?」

「はい、ガリヤです。ちなみにジュリアス・シーザーの著書『ガリア戦記』というのが頭に浮かんで、その語感が、なんだかいい感じがして…」

なんとローマ帝政拡大の立役者であり、軍事の天才としても知られるシーザーのパクリである。

「それ、いいですね!」

「私もいいと思います!ガリヤでいいんじゃないですか?」

「ガリヤにしまようよ!」

場の空気が変わったところで、彼女はさらにこうたたみかけた。

「あと…食べたガリヤとか、出たガリヤとか、したガリヤとかの意味を持たせたいのですが…」

さすがプランナーの発想とでも言うか、これがまた大ウケだった。

——ガリヤを読んで「食べたガリヤ」になって欲しい「綺麗になりたガリヤ」になって欲しい「楽しいことしたガリヤ」になって欲しい、ということですか？——

「そうです」

「読んだらもう、何かしたくてしたくて、じつとしていられなくなるんですよ？」

「そうですね！」

満場一致で、ガリヤと決まった。

しかし、瀬川さんはなぜ「戦記」など持ちだしたのだろうか。そして彼女たちはなぜこうもあっさり賛同したのだろうか：考えるまでもない、皆、戦士だったのだ。

《はじめに言葉ありき》は聖書の一節。《名詮自称》という仏教熟語もある。また《名は体を表す》とことわざにあるように、名前が本質や実態を表すというのは古今東西の承認事項だ。とすれば、戦記由来の名を持つガリヤが、戦いに明け暮れたとしても不思議は無かった。

もとより、いかなる会社であれ人であれ、大なり小なり、中なり微なり、さまざまな戦いの中にある。そして勝ったり負けたりする。また最大の敵は自分だったりもする。

しかし大局から見れば、勝つても負けても大差ナシ。戦いなんてチョロバカバカしい。

ただ、もしそこにひとつ意味を持たせるとすれば、観戦席ではなく戦いのフィールドに立つことだ。そして力いっぱい戦うことだ。たぶんそれが生れてきた理由、生きていく理由：私はそう思う。